

♪ 2021年度 **poco a poco** ♪

Nr. 2

2021年4月21日(水)

文責:プファイル・辰巳

April ! April !

Der weiß nicht, was er will.

Mal Regen und mal Sonnenschein,

Dann schneit es auch wieder zwischendrein.

April, April, der weiß nicht was er will.

4月! 4月!

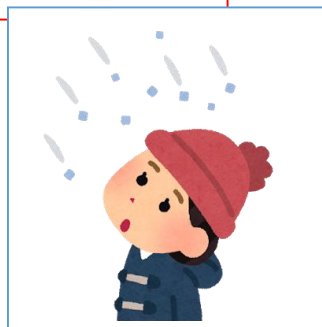
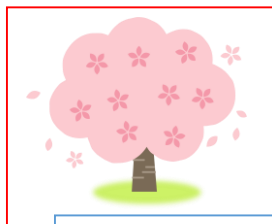
4月は何をしたいのか自分でも分からないんだよ。

雨が降ったかと思えば、お日様が輝いたりする。

時々、雪も降ったりするし。

4月、4月、4月は何をしたいのか、

自分でも分からないんだよ。



ドイツでは Aprilwetter (4月の天気) は変わりやすい

ことの代名詞のようです。今年の3月から4月にかけてのお天気は、暖かかったり、寒かったり、雨や雪が降ったり、晴れたり・・・とめまぐるしく変化しました。満開の桜と雪景色を一緒に目の当たりにした日もありました。日本にも「花冷え」などという言葉がありますね。美しい響きのある言葉です。

そんな中、コロナ対策が強化され、全学年オンライン授業になりました。長時間PCやタブレットの画面を見続けることになり、目が疲れ、集中力が持続しなかったりと、大変なことも多々あると思います。

スッキリと晴れ上がった青空の下、元気にみんなが登校し、お日様の光を浴びながら運動したり、歌ったりできる日が一日も早く戻ってくるように祈っています。



音楽こぼれ話 <楽譜出版のお話し ① 楽譜の歴史>

現代の西洋音楽の楽譜は世界共通。5線紙の上に音符の玉(「おたまじゃくし」なんていうふうに住ぶ人もいますね。)が並んでいます。フランス語やドイツ語が読めなくても、楽譜の決まりを知っている人なら、ドビュッシーやベートーヴェンの楽譜を読んで、練習することができます。



5線紙ができる前は、4本線に四角い音符が並んでいました。そういう昔の楽譜を、博物館などで見かけたことがある人も多いことでしょう。4本線に描かれていたのは1000年ほど前のことです。それよりも昔、古代ギリシアでは、歌詞の上に音の高さを文字で記した「文字譜」があったそうです。

4本線の楽譜は主に教会の中で歌われるグレゴリオ聖歌などを描き記すために生まれ、発達してきました。始めは単旋律で歌われていた聖歌が、声部を増し、音域も広がると、楽譜の線の数も増え始めました。7線譜、8線譜にまで広がった時期もあったそうです。楽譜の様々なルールが決まり、5線譜に落ち着いたのが17世紀だったといえますから、大バッハやヘンデルが活躍したバロック時代には、今のような5線譜が整っていたのですね。

楽譜の記譜法が固まるのと並行して、印刷技術も発達してきました。活版印刷術は言わずと知れたヨハネス・グーテンベルクが、ここドイツのマインツという町で実用化に成功しました。1453年のことです。その20年後の1473年には、楽譜の機械印刷が始められたそうです。16世紀に入ると、ドイツだけではなく、イタリアやイギリス、フランスでも楽譜の機械印刷が始まりました。

18世紀に入ると、音楽界でも出版業を生業とする会社が、起業され始めました。ドイツのブライトコップ&ヘルテルやショット社、イタリアのリコルディ社など、現代も老舗として残っている出版社もあります。音響技術が未開発だった19世紀の音楽産業を担っていたのは、これらの音楽出版会社だと言われています。

20世紀から21世紀にかけて、音響の世界だけでなく、楽譜出版の世界でもデジタル化が進みました。楽譜作成用ソフトもいろいろ開発され、スコアからパート譜へクリック一つで置き換えたり、記譜上の誤りを即座に見つけてくれたりします。便利になったものです。

今年度は「楽譜出版のお話し」を、しばらく続けさせていただきます。